

# ミャンマーの小学校教員養成に対する支援の実際と展望

幾田 伸司・余郷 裕次・村井万里子

## 1. はじめに

日本型教育の海外展開は、多くの国・地域で、様々な教科において実施されている。官民協働で日本型教育の海外展開を推進することをうたった「日本型教育の海外展開推進事業 (EDU-Port ニッポン)」では、2016 年度から 2020 年度の期間に、36 の国・地域でパイロット事業を実施したことが報告されている<sup>(1)</sup>。

鳴門教育大学でも、様々な国際教育協力活動を展開し、多くの支援事業を受託してきた。その一つである「ミャンマー国初等教育カリキュラム改訂プロジェクト」(CREATE プロジェクト、以下 CREATE と呼ぶ。)の本邦研修に、我々は講師の一員として参加した。具体的には、本学が受託した CREATE のミャンマー教員養成課程の整備にかかわる 2016・2017 年度の研修に、講師として支援を行ったのである<sup>(2)</sup>。本稿では、その際の我々の関わりの一部を報告するとともに、教育文化の異なる他国・地域に日本型教育を発信する場合の課題を当事者の経験や所感をふまえて検討したい。

## 2. CREATE と本邦研修の概要

CREATE は、2014 年から 2021 年にかけて JICA によって実施された、ミャンマーの教育改革の小学校部門を支援するためのプロジェクトである。児童中心型教育への転換を目指した同国の教育改革においては、教育理念・教育内容の刷新、新しい理念を具現する新教科書の作成、新しい教育理念に沿った授業方法への転換、新教育を実践する教師の育成（教員研修の実施、教員養成システムの整備）などが、並行して進められた。

CREATE は、これらの教育改革全般に対する支援を行っている。小学校教育の改革については、日本の各教科教育の専門家と連携しながら、日本型教育を反映した小学校教科書と教師用指導書を作成し、新教科書の理念と内容を現地スタッフと共有したうえで、教科書・指導書のミャンマー語訳への支援を行った。教科書・指導書の作成は低学年から順次進めてゆき、2021 年までに全学年の新教科書・指導書がほぼ完成し、2022 年 10 月時点の情報では、今後も継続して使用される見通しだということである。また、教師教育・研修については、教員養成カリキュラム編成への支援、教員養成学校 (Education College: 以下、EC) で使

用するテキストと指導ガイドの作成支援、ECの授業実施に対する助言などを行っている。

ミャンマー語科については、筑波大学の長田友紀氏が国語科教育の専門家スタッフとして教科の指導方針・教科内容の策定、教科書・指導書の作成、評価方法の開発、授業実施支援など、全般に対する支援業務に携わってきた。新課程のミャンマー語科では、知識中心の指導事項から問題解決力や批判的思考力といった高次思考力の育成を目指す方向へ転換が図られており、授業方法も教師の講義と暗記暗唱を中心としてきた従来の形式<sup>(3)</sup>からの脱却を目指している。それに伴い、指導書に掲載する授業案も、言語活動やグループ学習など、学習者の活動を取り入れた形態が多く盛り込まれた。2016年の第一回研修時、ミャンマー語科の新しい教科書・指導書は、第2学年までの草稿が完成した段階であった。

教員養成カリキュラムの開発については、ミャンマー国内で制度の設計が進められるのと並行して、鳴門教育大学が本邦研修を受託し、支援にあたった。本邦研修の主たる目的は、ECで使用する教育法科目のテキスト（学生配付資料）、指導ガイド（指導の手引き）、授業で使用する教材を開発し、日本の教員養成の実際に即して鳴門教育大学のスタッフから助言を受け、ブラッシュアップすることである<sup>(4)</sup>。研修で作成したテキストの内容は、その後ミャンマー国内でECテキスト等を作成する際に参照され、指針の役割を持つことになる。合わせて、来日中に日本の小学校や大学の授業を参観し、新課程の教育や授業方法のモデルとなっている日本の授業観について理解を深めるという目的もある。

鳴門教育大学での研修は、以下の3回にわたって実施された<sup>(5)</sup>。

第1回 2016年6月19日～7月2日

第2回 2016年10月31日～11月11日

第3回 2017年11月6日～11月16日

本邦研修には、ECテキスト作成チームのメンバー（以下、メンバーと呼ぶ。）が、各教科1～2名程度派遣されている。メンバーはECの教員で構成されており、第1回研修で来日したミャンマー語科の担当は1名であった。第2・3回も1～2名程度がミャンマー語科担当として来日したが、メンバーの交代もあり、固定されてはいない。鳴門教育大学の国語科教育コースからは、余郷裕次を統括として、村井万里子、幾田伸司の3名が研修の講師として支援にあたった。

CREATEでは、ECテキストの作成プロセスを以下のように設計していた。

- |     |       |  |
|-----|-------|--|
| 研修前 | STEP1 | 現行のECの指導内容のレビュー                                      |
|     | STEP2 | 新初等カリキュラムの理解、教員に求められる資質能力の理解<br>(CREATEの専門家スタッフとの協議) |
| 研修中 | STEP3 | 教科教育法、教科内容学の理解                                       |
|     | STEP4 | 各科目の目的、育成すべき学生の姿の明確化                                 |

STEP5 教科教育の内容の検討

STEP6 各章ごとの具体的な内容・活動の検討

研修後 STEP7 各章の執筆（研修後の取組）

メンバーはECのスタッフから選ばれており、児童中心の授業観も理解している。一方で、ミャンマーでは活動中心の授業形態自体が一般的でなく、教材をどのように使い、どのように学習活動を進めるかという具体的なレベルでメンバーがどの程度授業イメージを持っているかは未知数である。思考力・読解力の習得を目指す新しい教育内容についても、ようやく第2学年の草案が提示された時期なので、メンバーが十分に理解できていない可能性もある。本邦研修はこうした状況下で実施されたため、STEP6の「テキストの具体的な内容・活動の検討」を中心課題としているものの、STEP3～5の日本で育成している教師像や教師教育の実際について理解を深めることも、研修内容の柱の一つとして重要になる。

研修プログラムは、メンバーがテキストと指導ガイド（各時の講義内容、本時計画）の原案を作成し、鳴門教育大学スタッフとのセッションで意見を交換して原案のブラッシュアップを図ることが中心となる。1回のセッションは90分程度で、期間中に4～5回実施した。テキスト作成に係る業務以外では、日本の教師教育についてのレクチャー、附属小学校の授業の参観、本学の教育法科目の講義の参観なども行われた。このうち、国語科教育コース開講の「初等国語科教育論（余郷）」では、音読練習など、教師の授業技術の向上をねらった学習活動を取り入れている。そうした講義に触れ、教師のレクチャーだけではない講義のイメージを持てるようにした。このように、日本の小学校や大学の授業をメンバーが見聞することで、日本の教育文化と教員養成に対する理解を深めることをねらった。

### 3. ECのカリキュラム

ECのテキストに言及するにあたって、まずミャンマーの教員養成システムとECの概要について、メンバーのプレゼンテーションと田中義隆（2017）の記述に基づいて説明しておく。

ミャンマーの教員養成は、主として4年制大学とECとで行われている。ただし、大学の教員養成課程は少なく、実質的にECが教員養成の中核を担っている。ECの課程は1年制と2年制があり、どちらも小学校教員の資格を取得できるが、主となる課程は2年制である。2年制課程を修了した者は、小学校で教員経験を積んだ後、中学校教員になることができる。これがミャンマーにおける主たる教員養成の道筋である。なお、大学の教員養成課程を終えた者は、まず中学校教員となり、経験を積んだ後に高等学校の教員になることができる。

ECの年度は12月～10月で設定されており、12月～8月が講義期間で、その後、9～10

月に実習（実習校観察1週間、実習6週間、事後指導1週間、計40日間）が行われる。講義科目は、2年制課程では17科目が設置されており、内訳はメソッド（教育法科目）8、アカデミック（主要教科専門科目）5（必修3、選択2）、正課併行教科（補助教科専門科目）4である。ECで使用されるテキストと指導ガイドは全国共通である。教員個々に講義の設計が委ねられている日本では考えにくい、ミャンマーでは教員として必要な知識・技能、基礎となる資質・能力は全国共通のものが設定され、その学習手順も一つしかないことになる。

ECの講義は1コマが50分で、1科目につき年間56コマ（週2～3コマ）である。このうち、「ミャンマー語教育法」について、メンバーからは次のシラバス案が示された。

- |                |         |
|----------------|---------|
| 1 目的           | : 6 コマ  |
| 2 カリキュラム       | : 6 コマ  |
| 3 子供の学習のありよう   | : 1 コマ  |
| 4 子供の学習を支援する方法 | : 35 コマ |
| 5 評価           | : 8 コマ  |

教科の教育理念と指導方針を学ぶ「目的」、教育内容と系統性を学ぶ「カリキュラム」、児童中心主義という授業理念を学ぶ「子供の学習のありよう」、具体的な指導方法を学ぶ「子供の学習を支援する方法」、評価の考え方と方法を学ぶ「評価」という柱立てとなっており、この流れが基本カリキュラムとなる。

#### 4. 本邦研修の実際

第1回研修までに我々は、新課程のミャンマー語科教科内容原案と新教科書の草稿（第2学年用）を受け取っていたが、ミャンマーの教育の実際についての知識はほとんどない状態であった。新課程の教科書は日本の教材と似ているので、この時点では日本に近い授業が小学校で行われており、そうした活動型学習を運営する授業実践力の育成を支援することが研修のねらいだと捉えていた。第1回研修の冒頭で、前述したミャンマーの教育改革の現状と、現行教員養成カリキュラムのプレゼンテーションがあった。この時点でようやく我々は現地の教育文化を把握し、新課程の授業プランが一般的な学習形態ではないことを理解した。

こうした状況でセッションを開始したため、第1回研修の初期は、日本で実践されている授業の理念と方法の共有を図ることを目指した。日本の活動型の学習では、「書くこと」の指導を行う場合でも、授業中の学習活動では教材資料の読解、発表、話し合いなどが行われる。「書くこと」が指導事項として重点化されるとしても、様々な言語活動を複合的に実践する中で授業が進んでいくのである。新課程の学習では、このように児童の学習活動を計画する授業が中心となる。そのため、学習者が言語活動を行い、その活動を通して指導事項の

(44)

習得を目指すという方針で授業を設計することが重要であるという理念の共有を図った。

第1回研修の中盤以降は、メンバーが作成した教育法テキストのアウトラインについて検討した。ディスカッションには、我々とミャンマー語科担当メンバー以外に他教科（英語科など）のメンバー、通訳の方も参加し、7～8人程度で行った。この際に作成したカリキュラムが、前述のシラバス案である。

第2回研修からは、具体的なテキストと指導ガイドの原案について、セッションを進めた。新しいECテキストは、新しい授業の形式を実践できる教師の指導能力の向上を目指している。そのため、「子供の学習を支援する方法」には35コマがあてられ、各コマで教材を変えてマイクロティーチングを繰り返す指導計画となっている。そこで、第2回研修では、1年生の詩の単元について、「子供の学習を支援する方法」を中心にテキストの作成を進めた。具体的な一コマの展開は、5～6人のグループをつくり、教師役1名がマイクロティーチングを行い、グループでその振り返りを行うという手順を、2回ずつ行うというものである。メンバーが当初作成した「マイクロティーチングの手順」(「4 子どもの学習を支援する方法」のページに掲載)の原案は、以下の通りである。

(1) Teacher's Guide Review (指導書を読んで内容をつかむ)

指導書を読む前に、次の重要事項を確認する。

- ・目的
- ・主発問
- ・授業での教授過程
- ・教材をいつ、どのように使うか

(2) Preparation for Micro Teaching (準備する)

- ・指導書に示されている授業の流れを確認する。
- ・その授業の内容と活動を確認し、教師の支援を準備する。

(3) Micro Teaching of Each Lesson (実践する)

- ・実践班と観察班の2グループに分かれ、実践する。

(4) Reflection of Micro-Teaching (振り返る)

ここでのマイクロティーチングは、教材に応じて指導方法を考えることから始めるのではなく、指導書で提示されている授業プランに沿ってシナリオ通りに授業を展開する練習をするというものである。実践的ではあるが、(1)(2)に示されているように、指導書のシナリオをなぞって授業を進めようとする傾向が強い。そのため、(3)(4)の授業実践と振り返りでも、学習者の反応に合わせて授業を展開していく方向ではなく、学習者の反応をコントロールしてシナリオ通りに授業を進める形をモデルとして、学生の実践と討議が進んでしまうのではないかと我々は考えた。一方で、マイクロティーチングの手順自体を大きく変えることは難しい。そこで、「初等国語科教育論(幾田)」で配付した「授業を見るとき的心得」(【資料】)

を英訳し、メンバーに提示した。これは、本学2年生に授業観察を行う際の留意点を示したものである。これを解説し、日本型の国語科授業においてどのような点が重要になるかの手引きとした。これは、メンバーが附属小学校で授業観察を行う際の指針の役割も持たせた。

第3回も、教材を変えてこうしたセッションを研修期間中、週に2度程度行い、テキストと指導ガイドの作成について支援を行った。

## 5. 本邦研修の振り返りと課題

事後アンケートの記述では、本邦研修は肯定的に受け取られていた。実際に授業を見る経験の重要性は言うまでもないし、理念ではなく具体的に授業をどう行うかというレベルで議論できたことも有益だったと捉えられたようである。一方で、教育文化が異なる他地域に対する支援を行う講師の側から見たとき、課題に直面し、困難を感じる場合もあった。そうした課題について、所感を交えながら検討したい。

### ○授業観・教師観のずれ

ミャンマーの学校では、教師主導の教授・暗記型の授業が多く、児童の活動を組織するという授業の形態が一般的でないことは、前述の通りである。そのため、教師教育でも、決められた指導書の手順通りに授業を進める技術を身に付けるというイメージが強い。一方、日本では、教材や授業計画の開発・工夫は教師が行う当然の「仕事」だと捉えており、教育法科目や教育実習でも、教材研究、授業計画の作成、各時の展開の工夫を学生自身が自力で行えるようになることを目指している。こうした、教育文化、授業観、教師観が他地域と異なることは当然であり、その違いは共有しておくべきことであろう。しかし、国際協力の経験が少ない我々のような講師の場合は、自分たちにとって自明な「教師の仕事」が他地域では当然ではないことに、気づきにくい場合もある。また、相手地域の状況を熟知しておらず、ディスカッションを通して少しずつ理解していく局面も少なくないと思われる。

我々は当初、同じような授業形態を前提として議論を進めようとして、メンバーと授業観がかみ合わなかった。こうした授業観・教育観のずれを前提とし、それを埋める手だてを準備することが、当然ではあるが必要である。

### ○「授業に関わる用語」のちがいが

顕著だったのが、授業に関わる用語の違いである。日本では普段の授業の中で当然のように使っている用語がメンバーには伝わらない場面もあった。

たとえば、「音読」といった教育活動（教授スキル）については、「声に出して読む」という意味は共有できるが、その目的や効果は伝わりにくかった。日本の場合、児童の音読を通して教材の理解度を見取ったり、教師の範読を内容理解の補助としたりしている。このよう

な、「〇〇のために音読する」という発想は、メンバーと共有しにくかった。

また、「教材研究」は、用語自体がミャンマーにはない。これまでのミャンマーでは教科書自体が教えるべき知識であったため、教材を分析したり、教材をどのように使うかを考えたりするという発想がないのである。教材について考えることで思考力や読解力を育てる授業ではないため、教材を分析する必要もなく、方法も意識されてこなかったようである。そのため、ECのマイクロティーチングでも、教材研究をもとにして指導書の授業プランを改変するプロセスはなく、省察の内容も声の出し方や説明の仕方といった表面的な授業技術になりがちであった。我々の経験からは、「教材研究」をせずにマイクロティーチングを繰り返しても、授業実践力向上の効果は薄いと思われる。「教材研究」の方法をECのテキストに入れ込むことは現時点では難しいが、こうした日本の授業の進め方や、準備のための方法自体を学ぶことも、日本型教育を海外展開するためには不可欠になる。

## 6. おわりに

教育文化の海外展開に際しては、現地の教育文化との接合が課題となる。ミャンマーのように新しい教育文化の導入と教育改革が同時に進められる場合は特に、元々ある教育理念や授業方法と外来の新理念との衝突、軋轢が生じやすい。新しい教育理念、教育内容、教科書、授業方法への転換といった教育改革が他国の文化を輸入する形で実践されることは、終戦後の日本に経験主義教育が導入された局面と類似している。戦後初期の混乱を経て新教育が定着し、日本型教育として形作られていく過程は、ミャンマーに対しても有益な助言を行える経験となるだろう。

教育文化の輸出にあたって、現地の教育文化を十分に理解し、できるだけ対立が少ないように進めることが理想ではある。しかし実際は、新理念の導入が先行し、旧来の方法と対立して混乱が生じることもある。特に、教育改革の設計に関わっておらず、受託した研修の講師としてプロジェクトに参加することになった我々のような立場のスタッフは、現地文化の理解が追いつかないまま支援にあたることがある。今回はミャンマー側スタッフが新しい教育文化や授業方法の導入に積極的であり、意欲も高かったため、我々が自文化を前提として提示する助言も積極的に受け入れ、理解しようとしてくれた。しかし、短期間の研修では議論がかみ合わないまま終わってしまう危惧もあろう。

今回の取組にあたって、日本型の教育文化が作り上げてきた独自の概念や方法が、他地域との交流にあたっては障害となる場合もあった。具体的な授業レベルで討議するとき、議論で用いる用語が共有されないと議論が進まなくなる。我々が普段用いる授業用語をどう翻案して説明すべきかも、国際協力にあたっての課題になると考えられる。

末筆となるが、周知のようにミャンマーでは不安定な情勢が続いており、教育改革の進捗についても不透明な状況にある。一日も早く、ミャンマーの学校に安心して学べる環境が戻ることを祈念している。

### 【注】

- (1) <https://www.eduport.mext.go.jp/about/summary/> (2022年7月24日閲覧)
- (2) 幾田は、本邦研修に加えて2019年9月にミャンマーに赴き、現地でのセッションにも参加した。
- (3) 田中義隆『ミャンマーの教育』、p.107
- (4) 第1回研修時は研修期間内でテキストの作成を進めることが目標であったが、様々な教育改革が並行して進んでいる現地の状況を鑑み、第2回研修からはモデル教材について重点的にテキスト・教材・指導ガイドを作成することになった。
- (5) 第4回研修も予定されていたが、諸般の事情によって中止となり、以後はミャンマー国内でテキスト等の作成が進められることになった。

### 【参考文献】

田中義隆 (2017) 『ミャンマーの教育』 明石書店

### 【謝辞】

本稿は、JSPS 科研費 19K02699 の助成による研究成果の一部である。本稿の内容の一部は、第141回全国大学国語教育学会ラウンドテーブル「グローバル社会・多言語多文化社会に対応する日本の国語教育の再構築—日本の国語教育の海外展開の事例を中心に—」で報告した。関係各位に、記して御礼申し上げる。

### 【資料】

#### 授業を見るとき的心得 How to observe classes

- ① 教師の発問や学習者の反応、板書などは、必ずメモを取りましょう。

Always take notes of teacher's questions, how learners react/respond, and how teacher writes on black board.



(48)

気づきなどがあれば、一緒にメモすること。後で見て、授業の様子が思い出せるのがベストです。

If you notice something, take notes of them together with above. It is the best that you can recall the class situation in retrospect.

- ② まず、学習者の様子をよく観察すること。

First of all, observe the learners.

学習者の活動や雰囲気はどのようになっていますか。どんなタイミングで雰囲気が変わりましたか。そのような雰囲気になった理由は何でしょうか。

What the activity and atmosphere of learners are like? At what moment, the atmosphere changed? What was the reason for that change? (teacher's question/children's statements, etc.)

- ③ 教師の言動に対する学習者の反応に注意すること。

Pay attention to learners' reaction on teacher's words and behavior/actions.

教師の発問や指示は、学習者にとってわかりやすいですか。教師の発問や指示をどのように受け取っているか、学習者の反応から推測しましょう。

Are teacher's questions and instructions easy for learners to understand? Imagine how learners receive the questions and instructions from how they react/respond.

- ④ 教室の雰囲気に気を配りましょう。(かたい、だらけている、集中しているなど)

Pay attention to the atmosphere in the class, (tensed, dragging, concentrated, etc.)

気になる学習者に注目して観察してもよいし、全体の雰囲気を見てもかまいません。

If you have someone concerned, you can pay attention to that learner, or you can also observe the overall atmosphere.

- ⑤ 教師の言動と学習者の言動の対応を見ましょう。

Observe the correspondence between teacher's words/behavior/actions and those of learners'.

学習者は、教師のどのような言動にどのような対応をしていましたか。教師は学習者のどのような反応にどのような対応をしていましたか。

How learners reacted on what teacher's words/behavior/actions? How teacher reacted on what learners' reaction/response?

- ⑥ 教師の言動の流れをとらえましょう。

Grasp the flow of teacher's words/behavior/actions.

発問や指示は、いつ、どのようなタイミングで発していましたか。学習者の反応が悪いとき、教師はどのような補助や支援を行っていましたか。

When and at what timing/moment the teacher made questions and instructions?

When learners' react was not what teacher had expected, how teacher supported learners?

- ⑦ 学習者の発言に対して、教師はどのように対応しているかを観察しましょう。

Observe how teacher reacts/responds to learners' words/questions.

学習者の発言の後、教師はどのようにまとめていましたか。学習者の発言の後、教師はどのように返していましたか。学習者の発言を、教師はどのように板書していましたか。

How teacher summarized after learners' comments/presentation? How teacher responded to learners' comments/munnurs? How teacher wrote on the blackboard learners' comments/presentation?

- ⑧ ワークシートなどの支援教具の使い方を見ましょう。

Observe the usage of learning materials.

ワークシートなどは、学習者の思考や活動に対して適切な支援になっていますか。

Are the materials effective in supporting learners thinking and activities?

- ⑨ 個別活動の時、教師は机間指導で何をしているかを観察しましょう。

Observe what teacher is doing, moving around among learners during individual works.

教師はどのような学習者にどのような支援を行っていますか。学習者の活動の様子はどのようなものですか。始めるまでに時間はかかっていますか。

How teacher supported learners during individual works? What learners' activities were like? Did they take time before starting the activities?

- ⑩ まず、よいところを吸収しましょう。

First of all, learn from good points of the class observed.

気になることがある場合は、自分ならどうするかを考えましょう。

If you notice something, think how you would do or how you would improve.

(いくた しんじ・本学教員)

(よごう ゆうじ・本学教員)

(むらい まりこ・本学名誉教授)